

春らしい陽気になってきました。

現在会員登録数 4,382 人さま。次号は 5 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち ※今月は休載です

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■  
【1】お知らせ

●「第158回日本児童文学学会 関西例会」

シンポジウム「近代日本の児童文学と歴史読み物 -ヒーロー・ヒロインの受容史・社会史」

登壇者：今田絵里香（成蹊大学）、榊原千鶴（名古屋大学）、アーフケ・ファン＝エーワイク（日本学術振興会外国人特別研究員）、鈴木彰（立教大学）

日時：5月24日（土）13：00～16：30

会場：大阪府立中央図書館 多目的室 定員：60人 参加費：無料

主催：日本児童文学学会 関西例会（IICLO 共催）

※事前申し込み不要、詳細は↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/02\\_lecture/index.html#070524](http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#070524)

◇大阪府立中央図書館 国際児童文学館では、小展示「明治の子ども“みる・よむ・あそぶ”～昔むかしのヒーロー・ヒロインたち～」が開催中。

（アーフケ・ファン＝エーワイク解説、IICLO 協力）

<https://www.library.pref.osaka.jp/97044>

（国際児童文学館のページへ）

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → [http://www.iiclo.or.jp/donation\\_10th.html](http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html)

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube 版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll196>

※公開内容一覧は → [http://www.iiclo.or.jp/ml\\_youtube/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html)

● Instagram 随時更新 [https://www.instagram.com/iiclo\\_official/](https://www.instagram.com/iiclo_official/)

● X（旧 Twitter）毎日更新 [https://twitter.com/IICLO\\_News](https://twitter.com/IICLO_News)

【2】コラム

\*\*\*\*\*

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Satoko's Talk

\*\*\*\*\*

『キャロットバトン』 こまつあやこ/著 毎日新聞出版 2025年2月 対象年齢：小学校高学年以上

\*今回のゲストは当財団特別専門員の小松聡子さん（S）です。

あらすじ：友真（ゆうま）は、創体スポーツ大学付属小学校（略して創スポ小）に通う小学5年生の少年。5歳の受験のとき、たまたまとび箱をとんでしまったことから、スポーツに特化した小学校に入学したが、実は運動が苦手で、童話が好きで書いている。幼いときは、ぜんそくで入院が続き、病院友だちだった啓太に運動会でリレーの選手になると宣言するが、望みは薄い。ある日、学校図書館に創作ノートを忘れ、それを拾った背が高く運動の苦手な6年生の咲絵（さえ）に声をかけられる。そして、友真の書きかけの童話を4人の男女でリレーをしながら仕上げることになる。初出は「毎日小学生新聞」（2022年4月1日～7月6日）。

S：まず、『キャロットバトン』というタイトルに魅かれました。

Y：ニンジン+バトン。キャロットは、友真の創作ノートの色であり、ウサギたちがニンジンをしよって森の中を走るという友真のストーリーの設定から来ており、バトンは、実際の運動会のリレーとお話をリレーするという二つの意味がかけられています。

S：友真、咲絵、理瑠（りる）、千弦（ちづる）の4人が、童話リレーをし、そのことが章ごとに書かれています。4人の性格や悩み、好きなことなどがわかりやすく描かれていて、キャラクターがつかみやすいと思いました。

Y：運動が苦手で童話を書くことが好きな友真、背が高いけれど、やはり運動は苦手な咲絵、運動はそこそこできて、ファッションに興味があり、文字を書くのが苦手で、太りたくないと思って食べる量を強く意識している理瑠、全日本子ども陸上大会の5年生の部で優勝するほど足の速い千弦と多様です。

S：咲絵は、友だちを失いたくなくて、見えないセロハンテープでくちびるの両端を固定するみたいに、笑顔をつくっています。背の高さばかりが目立って、運動が得意だろうと決めつけられるのが嫌だと思っていたのに、友真のノートを見つけたとき、「ウサギの童話を書くのは女の子だ」と自分も決めつけていたことに気づく場面は心に残りました。また、千弦は、体育が苦手なために転校する紗都美（さとみ）にクラスを代表して「努力すれば道は開ける！」と書いたカードを渡した時に、「努力バカ」とつぶやかれた苦い思い出があります。

Y：それぞれが葛藤を抱えていて、バランスがいいですね。そして、私は、特別な小学校を舞台にしたことによって、なじめない場所での居心地の悪さがはっきりと伝わる点が興味深かったです。

    作中の創作童話も楽しく読みました。

S：4人が書くウサギのキャラクターに、それぞれ自分が投影されています。走ることが苦手な「ピョンマ」、耳が長いのに足がおそい「うさえ」、洋服を作るのが好きな「リルラビ」、走ることが好きでがんばっている「チーターラビット」。それらのウサギたちが紡いでいく物語がどう着地するかを想像しながら読むのも楽しかったです。

Y：リレーによって童話がどんどん発展していった、友真が結末を書くことになりませんが、創作のリレーをし、これまで知らなかった友だちと出会うことによって、最初に考えていた結末とは違う結末を書きます。ここからは、「書くとはどういうことか」「物語の結末の意味」などが読み取れると思いました。

S：親が勝手に判断して、いきなり転校しようと言うのに対して、友真が「決めつけないでよ」と言って、自分で進む道を選んだ結末にたのもしさを感じました。他の3人もそれぞれ成長が読み取れ、さわやかな読後感が残りました。

\*\*\*\*\*

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

第116回「[手紙(二)]」

反転する力

〈印度のガンジス河はあるとき、水が増して烈しく流れていました。それを見ている沢山の群集の中に、尊いアショウカ大王も立たれました。大王はけらいに向かって「誰かこの大河の水をさかさまにながれさせることのできるものがあるか」と問われました。〉

これが、「[手紙(二)]」という表題の短い物語の書き出しです。けらいはみな「陛下よ、それはとても出来ないことでございます」と答えるのですが、ピンズマティーといういやしい職業の女が真心をこめて河に祈ると、たちまち、さかさまに流れます。

感動した大王は、「どうしてそちのようないやしいものにこんな力があるのか、何の力によるのか」とたずねます。女が答えます。――「陛下よ。私は私を買って下さるお方には、おなじくつかえます。(中略)ひとりをたつとびひとりをいやしみません。陛下よ、このまことのところが今日ガンジス河をさかさまにながれさせたわけでございます」娼婦である女は、大王に率直に述べます。

女は、「まことの力」とも「まことのこころ」ともいうのですが、「まこと」とは、賢治が思いをこめる、大切なことばの一つで、さまざまな作品に出てきます。「まことのことばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ」「(まことのことばはここになく／修羅のなみだはつちにふる)」(いずれも「春と修羅」)、「すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすむ人は、いつでもいっしょに行くのです。」(「めくらぶどうと虹」) などなどです。

「すると、ああ、ガンジス河、幅一里にも近い大きな水の流れは、みんなの目の前で、たちまちたけりくるってさかさまにながれました。」――女の「まことの力」は、河の流れを反転させ、「いやしいもの」は「大きなもの」に変わります。

この反転する力は、賢治に固有のものかもしれません。不意に、「どんぐりと山猫」で、一郎の助言を得て、山猫がどんぐりたちに申し渡したことばを思い出します。――「このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていないなくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」(馬車別当)

によりました。)

\*\*\*\*\*

《3》子どもの本の珠玉のことば 70

\*\*\*\*\*

「むかし、むかし、あるところに」おばあちゃんは話しはじめた。「三匹のこぶたがおかあさんといっしょにくらしていました」

「ブタのおかあさんは死んだんだ」と、ウィリアム。

「まあ、死んでないわよ」

「死んだんだ。ベーコンは死んだブタからつくるんだよ。ブタのおかあさんは朝ごはんを食べられちゃって、皮は鳥のえさになったんだよ」

(「ウィリアム版『三匹のこぶた』『こわいものなんて何もない』ジャン・マーク/著 三辺律子/訳 パロル舎 1997年9月 p.120)

イギリスの作家、ジャン・マーク(1943-2006)の、「三匹のこぶた」のパロディ作品です。「ウィリアムとおばあちゃんは、ウィリアムのママが病院にいていいる間、一時間、お互いのおもりをする事になった。」と始まります。お互いが、おもりをしてあげていると考えているということを示唆するなかなか皮肉の利いた冒頭です。

ウィリアムの年齢は書かれていませんが、作品から、まだ文字が読めず、三輪車に乗っていることがわかります。ウィリアムは、おばあちゃんに「三匹のこぶた」のおはなしをリクエストしますが、引用のように、おばあちゃんの語りに何度も口をはさみます。そしてそこから、ウィリアムのおかあさんに赤ちゃんが生まれることを不安に思っていること、赤ちゃんのことをブタのように感じていること、そして自分はおおかみのように、何でも食べてしまいたい気持ちでいることが読み取れます。引用でも、ウィリアムがブタのおかあさんが死んでいると言うのは、自分をおばあちゃんに預けたおかあさんへのウィリアムの不満が反映していると考えられます。

また、ウィリアムとおばあちゃんの会話からは、二人のユーモラスな駆け引きが楽しめます。おおかみは一匹目のこぶたをサンドイッチにして食べたウィリアムが言ったので、おばあちゃんは二匹目についても、どうやって食べたかをウィリアムに聞きます。すると、ウィリアムは予想を裏切って「口で」と答えます。ここには、おばあちゃんの思う通りなんかにならないと思うウィリアムの強い意思が感じられます。引用部分では、ベーコンに関する知識をおばあちゃんに披露することで、自分がいかに賢くて知恵があるかを主張しているように読めます。

このように、この作品は、ウィリアムとおばあちゃんが「三匹のこぶた」のお話を語り合いながら、一言一言に複雑な感情が読み取れるおもしろさがある点が魅力です。(Y)

\*\*\*\*\*

《4》行って来ました!

\*\*\*\*\*

市立伊丹ミュージアムで6月1日まで開催されている「動物画譚展 おもしろくて不思議な動物たちの絵物語」に行ってきました。「動物」にまつわる昔話や説話を描いた絵巻や絵画、書冊、人形、印籠など、室町時代から昭和初期までの150点以上の作品が、五章に分けて展示されていました。

第一章「むかしむかし あるところに」は「桃太郎」「分福茶釜」「鶴の草子（鶴の恩返し）」「舌切雀」「花咲爺」「猿蟹合戦」「かちかち山」の絵巻や絵画などが動物たちに焦点を当てながら展示されています。おばあさんが拾ってきた桃が、普通サイズなので桃太郎が親指ほどの大きさに生まれている絵や、桃太郎が鬼退治に行く前にキセルを吸っている絵などがあり、さまざまな絵で昔話が伝えられ、楽しまれてきたことがわかります。『昔咄虚言桃太郎』（むかしばなしとんだももたらう）は、「桃太郎」の後日談で、桃太郎が竜宮城へ行き、最後は「浦島太郎」になったというお話で、江戸期（天明2年）にもパロディがあったことに驚きました。

第二章「めくるめく 動物の物語」は、狐、鼠、猫、猿の物語の絵が集められていて、迫力のある動物らしい絵や、ほんわかした絵、着物を着て完全に擬人化された絵などがありました。特に、鳥羽院に寵愛されながらも、院を病気にした妖狐の物語「玉藻前物語」の九尾の狐は、妖しく迫力がありました。第五章「舶来の動物たち」は、ラクダ、ゾウ、バクなど、画家が実際に見た海外の動物もいれば、想像で描いた動物もありました。円山応挙の「猛虎図」は、毛皮だけ見て描いたとは思えないトラで、特に心に残りました。

すべての展示物に、物語のあらすじや解説と、展示物そのものの解説がついていることで、絵から物語を想像してたっぷり楽しむことができました。歌川国芳や、円山応挙、葛飾北斎など有名な画家の手になっている見ごたえのある絵も、描き手がわからない素朴な絵もあり、今の時代と共通する「動物を見る目」もあれば、違う目もあることがとても興味深かったです。現在の絵本やマンガにつながるようにも思いました。（K）

市立伊丹ミュージアム <https://itami-im.jp/>

\*\*\*\*\*

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

\*\*\*\*\*

今月は休載します。

来月配信の次号（NO.177）は、第5章「古田足日先生」その2「散文性のかく得」（下）です。

<これまでの連載はこちらから>

<http://www.iiclo.or.jp/mlmagazine/watashinodeatta.html>

■ ----- ■  
【3】全国のイベント紹介  
■ ----- ■

● 刊行50周年深掘り企画②おしいれのぼうけん“出会い直し”ゼミ

講師：宮川健郎（武蔵野大学名誉教授、IICLO 理事長）

コーディネーター：橋口英二郎（童心社取締役編集長）

日時：5月16日（金） 18：30～20：00

場所：童心社 KAMISIBAI ホール ※後日、アーカイブ配信あり

定員：15人 ※有料、要申し込み

主催：童心社

● 大阪府子ども文庫連絡会 2025年度児童文化講座（全9回）

開催時期：6月～2026年3月 定員：250人 ※有料、要申し込み

会場：大阪府立中央図書館、大阪市立中央図書館

主催：大阪府子ども文庫連絡会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■  
【4】プレゼント  
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『キャロットバトン』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は5月13日(火)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

桜のあとは、新緑の季節。2階の窓から見える若葉が、昨年より高く見えるのは木々の成長なのでしょう。この一年、いかに成長したか、我が身を顧みて考えこむ。でもひとまず、今はまばゆい新緑にワクワクしよう。花粉の悩みもまもなく終わり、私にとってもうれしい春がやってきます。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html)

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp